http://aosa-eye.org

アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

2017 活動報告（2017 年４月～2018 年３月）　No. 10

2018 年 4 月発行

（2017 年 6 月、Pemba にて、井口博之撮影）

アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
第 10 回モザンビークアイキャンプ日記 …… 内藤　毅４
まだまだひとくぎり ……長澤利彦５
AOSA 2017 アイキャンプ……野口三太朗５
活動 10 年目……沼田美紀６
「今年はペンバだけど、来年はシャイシャイでよろしくね」……宝山晶子７
5回目の海外医療支援活動……石飛直史７
再びペンバでのアイキャンプに参加して ……井口博之８
アイキャンプ報告 ……島田晃良９
アイキャンプ報告 ……久長竜太９
Ⅲ．2017 年度事業報告 ……10
Ⅳ．2017 年度会計報告 ……11
Ⅴ．2018 年度事業計画 ……12
Ⅵ．2018 年度予算 ……13
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……14
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……15

（アイキャンプ終了時の記念写真、2017 年 6 月、Pemba にて）

Ⅰ．巻頭言

AOSA 理事長
徳島大学国際センター　内藤　毅

活動 10 年目を終了して

モザンビーク共和国（以下モザンビーク）への眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）を設立し、今までに 10 回のアイキャンプを無事行うことが出来、合計約 1,500 名の失明患者さんの手術を行うことが出来ました。これも皆様方のご協力があったからこそだと、大変感謝しています。しかし、この 10 年で何が変わったのでしょうか？現地の眼科医療状況は依然厳しい状況です。

モザンビーク保健省の依頼に従い、2018 年は再びシャイシャイでアイキャンプを行う予定です。前回のシャイシャイでのアイキャンプで分かったことですが、シャイシャイは首都マプトに近いにもかかわらず医療状況は厳しく、医療物資が不足しているため失明患者が取り残された状況でした。この状況は医療物資を投入すれば解決するように思えました。しかし、それが出来ない事が問題だと感じました。加えて状況は改善しないばかりか、さらに悪化しているようにも思われ、モザンビークの厳しい経済状況によると考えられます。保健省は問題解決のため我々の活動に期待しているようですが、年に 1 回のアイキャンプでは問題の解決にはほど遠いと思われます。以前から現地の問題はモザンビークの人々で解決して欲しいと願っていますが、現実は厳しいようです。

我々の最終的な目標はモザンビークの眼科医療の発展で、モザンビークの眼科医たちが我々に頼らず、独自にアイキャンプが出来るようになることが目標です。そのために現地の眼科医の技術指導を行い、手応えを感じるようになってきました。しかし、技術指導以上に経済状況が厳しいようです。2017 年 3 月にモザンビーク大統領が来日した際には、安倍総理夫妻主催の夕食会で、眼科医療の重要性を直接訴えることが出来ました。失明者の開眼治療は経済格差是正に直接繋がる事であり、今後のモザンビーク政府の取り組みに期待するところです。

毎年モザンビーク人眼科医をアイキャンプに招待し、技術指導とともに友好を深めています。さらに昨年はモザンビークの隣国のザンビアの眼科医をアイキャンプに招待しました。アフリカの近隣諸国が連携し、技術力を高め、彼らが意欲的に問題解決に向けて取り組んで欲しいと願っています。

2018 年のアイキャンプはシャイシャイで行う予定です。シャイシャイには我々が技術指導してきた眼科医が赴任しています。彼の活躍を見るのがとても楽しみです。モザンビークの医療状況の改善に向けて、現地の方々と一緒に考えていきたいと思っています。

微力ながら日本の代表の一人として国際貢献する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（ペンバ空港）

（ペンバ空港で記念撮影）

Ⅱ．活動の現場から

第 10 回モザンビークアイキャンプ日記

徳島大学国際センター　内藤　毅

６月７日(水)関空、成田～香港～ヨハネスブルグ
６月８日(木)ヨハネスブルグ～マプト～ペンバ
６月９日(金)～６月１３日(火)アイキャンプ
６月１４日(水)ペンバ～ヨハネスブルグ
６月１５日(木)ヨハネスブルグ～香港
６月１６日(金)香港～関空

2017 年のアイキャンプは再びペンバで行うことになった。昨年はシャイシャイで行い、しばらくはシャイシャイでの開催かと思っていたが、おそらくペンバからの要請が強かったのであろう。

また、船便で送った荷物がなかなか現地に到着せず、大変気を揉んだ。幸い、出発直前には無事届いたが、このこともあって、出発の時点ですでにかなり疲れていた。

６月７日（水）雨。ちょうど出発の日に梅雨入りの発表があった。午後２時過ぎに関空に集合した。姫路のツカザキ病院から長澤先生、野口先生、視能訓練士の石飛さん、そして大阪の井口さんのいつもの面々が集合した。同時期に成田空港から出発する看護師の沼田さんから無事チェックインしたと連絡があり、夕方のキャセイ航空の便で香港に飛行し、無事合流した。そして香港で乗り換え、ヨハネスブルグへ飛んだ。

６月８日（木）晴れ。早朝のヨハネスブルグに到着した。空港で綺麗な日の出を見た。ヨハネスブルグではザンビアの眼科医の Dr.Phiri が合流した。以前からザンビアでの活動要請があったが行く時間がないため、我々のアイキャンプを見に来てもらった。ヨハネスからペンバへのフライトでは機体不調のため出発ゲートで待たされた。今まで色々な経験があったので、ついつい悪いことを考えてしまった。しかし、到着が約一時間遅れただけで、無事ペンバに到着した。空港では眼科助手のセルジオさんと若い眼科医のクリストファー先生、そして、現地在住の宝山さん、協力隊の久長さんと島田さんが出迎えてくれた。長旅の疲れを癒すため、早めに夕食を済ませ就寝した。

６月９日（金）晴れ。今日から本格的にアイキャンプ開始となった。今回は地区ごとに分けて患者さんを集めている。はじめはムエダなどの遠いところからの患者さんたちでマコンデ族の人たちが多くいた。遠いところから来た患者さんたちを先に手術して早く帰ってもらおうという考えである。初日の患者数は多くなく５０人程度であった。診察の後は、手術室の設営と顕微鏡の組み立て、手術器具の滅菌依頼を行って日程を終了した。

（待っていたたくさんの患者さん）

６月１０日（土）晴れ。朝９時から手術を開始した。まず、長澤先生と野口先生が手術を開始し、ザンビアの先生も加わった。ザンビアの先生は女医さんでかなりアクティブである。

（ザンビアの眼科医を指導しました。）

モザンビークでも眼科医は女医さんが多いがおとなしい傾向がある。ザンビアの先生は今までにかなり白内障手術の経験があり、今までのこちらの眼科医に比べ手術技術は優れていた。昼過ぎには４２名の手術を終了した。その後、翌日の手術予定の患者さんの診察を行い予定を終了したが、思ったより患者数が少ない。ラマダンのためか、経済状況悪化のためアイキャンプに来る余裕がないのか色々考えてしまう。

６月１１日（日）晴れ。朝、海岸を散歩したが空気が清々しい。病院に到着後、早速昨日手術した患者さんの回診を行った。経過は概ね良好であり患者さんの笑顔が溢れた。回診後、さらに手術予定の患者さんを診察し、昼過ぎには４１人の手術を終了した。近隣の村から３３名の患者さんが来ると言っていたが、車がパンクし遅くに到着したため、翌日診察することになった。

６月１２日（月）晴れ。連日晴れである。前日手術した患者さんの回診後、前日到着した患者さんを

含めて診察し、手術患者さんを選択した。夕方には先天白内障の子供を含む７５人（７６眼）の手術を終了した。子供の手術はキューバ人の麻酔科医が全身麻酔を担当し、無事終了した。最終的には３日間で合計１５８人（１５９眼）の手術を終了したことになる。その後、次回に備えて物品を梱包した。前半は患者数が少なく、目標達成感という点ではやや不満ではあるが、ラマダン等の影響を考えると十分な成果が得られたと思う。

６月１３日（火）晴れ。前日手術した患者さんの回診を行った。困難な患者さんも多かったが結果は良好であった。特にすでに片目を失明している患者さんが一人で歩けるようになったのを見ると、感慨深い。その後患者さんたちと記念撮影を行った。溢れる笑顔と歓喜でいっぱいとなった。昨日梱包した荷物は宝山さん宅へ発送し全ての日程を終了した。

６月１４日（水）晴れ。往路と同じ経路で帰国の途に着いた。午後ペンバから空路ヨハネスブルグへ行き、ヨハネスブルグで一泊した。

６月１５日（木）ヨハネスブルグから香港に向けて出発。

６月１６日（金）香港を経由して予定通り関空に到着した。

まだまだひとくぎり

ツカザキ病院　長澤利彦

１０年目のアイキャンプがやっと終了した。振り返れば早いような遅いような１０年だった。１回目のアイキャンプに内藤先生から「１０年やってみんとわからん。1回２回で医療支援した気になるな！」との言葉を思い出す。その言葉に騙されて、いやいや励まされて自分では実は続けると思っていなかった１０年目のアイキャンプにも参加させていただいた。モザンビーク眼科医療は実にゆっくりではあるが確かに進歩している。今年のキャンプの収穫はなんといってもモザンビーク人眼科医が手術を完投してくれたこと。“モザンビークのことはモザンビークの人達で”という最終目標に少しではあるが確実に近づいた。またザンビアの眼科医も参加してくれて戦力として活躍してくれた。その女医さんのパワーには圧倒されてしまった。

モザンビークは一歩ずつ成長しているが、はたして私自身はこの１０年で何か進歩したのだろうか？ AOSA の活動が日常の診療や考え方、果ては生き方にまで当初は多いに生かされた。しかし、ここ数年は大事なことは内藤先生にすべて任せきりで、最近は自分自身の成長に何一つ生かせていないのではなかろうか？こんなことを内藤先生に相談すると、おそらく「そんなことは２０年やってみんとわからん！」と言われそうなので、また１０年後に結果を報告できればと思っている。

（手術翌日、回診中の長澤）

AOSA　2017　アイキャンプ

ツカザキ病院眼科　野口　三太朗

今年も AOSA のモザンビークアイキャンプに参加させていただくこととなった。今回で３回目である。年に１度のモザンビークとはいえ、その旅路の辛さはこの時期になると去年の辛さが鮮明によみがえるようになる。今年はいっそう特別な年であった。私の妻が妊娠しお腹が大きい状況の中の参加となったことだ。妻のことも、赤ちゃんのことも気になるが、妻もアイキャンプ参加をすすめてくれ、参加することとなった。

6/8　関空→香港→ヨハネスブルグ→ペンバ　ヨハネスブルグまでは3時間くらいの乗り継ぎ時間で順調にのりついていたが、ペンバに向かう飛行機の準備のため 1～2 時間ほど遅れてペンバに出発到着となった。

去年よりわかっていた、顕微鏡のローラーの破損を修理することも行った。修理といっても内藤先生が購入してきた新しいものに切り替えるだけなのだが、長年使用してきたためか、ねじが全くびくともしない。こちらから持ち込んだねじ回しでは回らなかったため、現地のセルジオにローラーを外してもらった。ローラーも新調して、器械設置もやっと終了となった。

術前診察にて白内障で回ってきた方々を診ると、明らかに一昨年よりも白内障の進行程度が軽い患者が多かった。これは、ペンバの一般市民、患者の白内障に対する意識などが高まった証拠であると思われる。我々は現地では超音波を使った手術ができないが、そのような手術も必ず必要になる時代がくるのであろう。SICS も日本では全くなじみのない術式であるが、３年目ともなるとスムーズに施行できるようになっているのを感じた。白内障のみではなく、ぶどう膜炎、外傷後、感染後の白内障も数多く認め、白内障のみでは視力の改善が大きくは望めない患者もあったが、大きな合併症無く終了した。毎年感じることではあるが、ちょっとした器械、道具があればもう少しいい手術ができるのにと思う

ことが良くある。たとえば、虹彩剪刀、虹彩リトラクターがあれば虹彩癒着で散瞳しない患者も手術しやすくなる。前嚢鑷子があれば、CCC ができる。縫着用の針糸、鑷子があればレンズを縫着できる。だが、実際にはこのような器械はない。欲が出てくるが、物資と現地の医療状況、環境に合わせた手術が必要となるのである。少しずつでもいいのでより高次の医療が提供できるようになり、また、現地医師にそれを学んでいただきたいと思っている。

手術は例年になくスムーズに進んだように感じる。手術患者も病院までの到着のバスの故障などで例年よりは少なかった。大きな事故もなく終わったことが何よりである。今年も JICA の方々にもお手伝いいただき非常に助かった。アイキャンプを通して、JICA の方々と友達になれるのはとてもうれしことだ。

黒檀の彫刻のお土産を購入したのだが、毎年恒例の？荷物チェックで黒檀の彫刻は駄目とのやりとりが 1 時間ほど続いた。そろそろ、お土産を買うのを辞めようかと思いながら買っては、この問答を繰り返してる。また、来年もアイキャンプに参加して、お土産買って、空港でのやりとりを楽しみたいと思います。

（回診前の野口）

活動 10 年目

山王台病院付属眼科・内科クリニック
看護師 沼田美紀

AOSA が今年で活動 10 年の節目であったように、私も海外ボランティアに参加するようになって 10 年が経ちました。参加するために初めて作った 10 年のパスポートの期限が切れ、更新をむかえます。

最初の頃は出国時や入国時などにもらえるスタンプがとても楽しみで、一つ増えるたびにワクワクしていた事を覚えています。ビザの申請も不安に思いつつ自分で手続きをして、無事に発行できると「また増えたなぁ」と眺めて嬉しく思っていました。

AOSA に参加するようになって 8 年が経ちました。すでにビザの取得は恒例行事になって来ており、通う道にも慣れて来ましたが、申請用紙が変わっていたり、料金が変更になっていたり、支払い方法が変わっていたりと、毎年ちょっと緊張します。途中からモザンビーク大使館に以前活動を手伝って下さった JICA の方達が働くようになり、今年も会えるかな？と楽しみも増えています。モザンビークへの旅は毎回遠いなぁと思います。自分と荷物が無事にモザンビークに到着した時点でその年のキャンプが半分は終わった様に感じてしまいます。

今年はペンバでのキャンプでした。毎回のことですが、病院からここを使う様にと言われた部屋には必要のないたくさんの物がある為、不要なものを部屋から出し、必要なものをかき集め、アイキャンプの OPE 室を作りあげていきます。何回か前から念を押さなくてもガーゼを大きいカストに作ってくれる様になっていました。もう少しコミュニケーションが取れたら次回に来る時何をどうして欲しいと言うことが言え、もっとお互いが効率良く進められるのかなと思います。

（キューバ人眼科医と沼田のツーショット）

今回初めて、患者さんが来た当日に検査をして、手術をして、次の日に診察をして帰るという方法をとりました。患者さんたちの時間やお金の節約はできたと思いますが、大人数の手術をするという所においての効率は悪いように感じました。

モザンビークの病院では今かなりの資金難ということで、医薬品が十分ではなかったり、集めたい患者さんたちが集められなかったり、一泊でも食事が提供できなかったりと厳しい状況下にあるとのことでした。今回は AOSA 側で食事などの援助をしてなんとかできたようですが、ガソリン代がなくて連れてくることのできなかった患者さん達がいたそうです。白内障により失明している人を救いたいというのが AOSA の基本理念ですが、その私達の活動が原地の負担にも又なってしまうという、もどかしい状況でした。今後の活動方法にも関わって来る

ことだと思います。
　今回のアイキャンプでは個人的な目標がありました。毎回アイキャンプに行くと(どこの国にいっても)体重が増えて帰って来ます。飛行機でむくむのを差し引いても増えているのです。今年はちょっと食べものに気を配って見ました。機内食を完食しないようにとか、夜の遅い時間の食事を食べすぎないようにしてみました。無事に増える事無く帰国できて、やっぱり今まで食べ過ぎていたのだなと反省しました。次回も気をつけようと思っています。が、食事が美味しいことは幸せな事なので適当です。
　最後に活動を支援して下さっている皆様ありがとうございます。一緒に活動した皆様いつもありがとうございます。JICA の島田様、久永様ありがとうございました。参加が２名で少なかったので、かなり負担が大きかったと思いますがとても助かりました。いつも快く送り出して下さる職場の皆様ありがとうございます。今後も活動に参加して行きたいと思います。

「今年はペンバだけど、来年はシャイシャイでよろしくね」

モザンビーク　宝山晶子

　「今年はペンバだけど、来年はシャイシャイでよろしくね」―保健省の眼科医療責任者のマリアーモ女史からの電話である。南部ガザ州のシャイシャイ病院には、多数の白内障患者が詰めかけていて、保健省としては日本の眼科医チームにシャイシャイ病院に毎年来てもらいたいというのが本音だが、北部ペンバ病院からは何としても今年は日本の眼科医チームに来てもらいたいという強い要請があり、それに抗しきれなかったようだ。それで今年はペンバで、来年はシャイシャイでという折衷案に落ち着いたようだ。
　ペンバ病院は、モザンビーク最北端のカボデルガド州の州都ペンバにある。インド洋に面した静かで、南国情緒豊かな美しい浜辺がある。また第二次世界大戦時、ドイツの潜水艦が常時駐留していたという世界屈指の水深を誇るペンバ湾がある。２００８年からカボデルガド州で始まったアイキャンプが、今年で１０年目になるのに、飽きられないでここまでこれたのは、美しい南国の自然に支えられたからといっても過言ではない。また行きたいと思わせる魅力がペンバにはある。昨年は保健省のたっての要請で、初めて南部シャイシャイ病院で行ったが、「やっぱりペンバがいい」と一行の喜ぶ姿が目にみえるようだった。
　そんな折、ペンバ病院から、「患者に出す食費を支援してもらえないか」と打診があった。こういう要請は１０年のアイキャンプで初めてなので驚いた。２０１６年４月、前大統領の隠し債務が公表された。前大統領が議会の承認を経ずに、２０００億円以上を外国の金融機関から借り、政府を保証人にした事件である。ＩＭＦはじめモザンビーク政府を支援してきた１４か国は、即刻支援を中断した。以来、モザンビーク経済は深刻な打撃を受けた。あれから１年余り、その影響は国民レベルにまで確実に浸透していた。公立病院の年間予算は半年で枯渇しているとメディアが伝えていたが、ペンバ病院も同様なのだろう。また、アイキャンプに来る患者さんは遠方から来る者が多い。役場など地方自治体がペンバ病院の要請を受けて車で患者を搬送するのが常だが、今年はガソリン代がままならず、何十人もの患者さんが搬送を中止された。
　長旅でお疲れにもかかわらず、眼科医の先生方はじめ、看護師の沼田さんらはもくもくとがんばってくれた。プロとはこういうものなのだろう。青年海外協力隊の二人も、率先してよく働いてくれた。日本チームの働きを毎度のことながら、心から誇りに思った。

(目薬を配る宝山)

　２０１８年６月には、１１回目のアイキャンプを南部シャイシャイ病院で行う。「１０年やれば何かが見えてきます」と内藤先生が言われたとおり、研修医時代にＡＯＳＡのアイキャンプに参加したことがあるモイゼス医師が、シャイシャイ病院の眼科医として、われわれを迎えてくれる予定である。海は荒涼として、取り立てて美しい自然がシャイシャイにはないが、招待した研修医が眼科医になり、彼とともに働けるというのは、日本人チームの一員として、この上ない喜びである。わくわくしているのは、私だけではないはずだ。

5 回目の海外医療支援活動

ツカザキ病院　視能訓練士
石飛直史

　今回私はアフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）に参加させていただきました。AOSA は 2008 年に始

まってから今年で 10 年目と大きな節目を迎えました。その節目に参加できたことをとても喜ばしく思います。

私は視能訓練士といって、普段は眼科で視力検査や視野検査など、主に目に関わる検査を行う仕事をしています。早いもので、今回活動に参加させていただいて 5 年目となりました。

初めて参加した時は200人近い患者さんが待合室に所せましと座っている様子に驚きました。また、時間や物資が限られているため手術前の検査が必要最低限のものしか行えず、日本との違いに戸惑いを感じたことを思い出します。当時、印象的だったのは患者さんが検査に対して抵抗する様子でした。目が見えず、また、病院に初めて来る方も多かったのだと思います。椅子に座るまでは誘導できますが、検査台に顔を乗せようとすると恐怖のためか途端に抵抗をされます。さらに、多くの患者さんが現地語しか使えないため、コミュニケーションが全くとれませんでした。そんな中で一生懸命身振り手振りを交えながら、患者さんの検査をしたことを思い出します。

5 回目となった今回はそんな様子ががらりと変わりました。患者さんの数や制限的な時間や物資は変わりません。しかし、患者さんがこちらの誘導に素直に応えることが多くなった印象を受けました。また、現地の病院スタッフが協力をしてくれるお陰で患者さんとのコミュニケーションもスムーズに行うことができました。毎回思うことですが、今年は特に AOSA の活動が受け入れられていると感じることができました。

活動は手術室でも行います。手術室での活動は、まず、眼科用の手術室や顕微鏡がないため手術室の準備や日本から送ってきた顕微鏡を組み立てるところから始めます。手術前は目の見えない患者さんに手術台に寝てもらうための誘導と介助を行います。さらに、手術後は患者さんを待合室まで改めて誘導します。その他に、医師の補助を行っている看護士の沼田さんに手術用の道具を渡すという役割や、検査結果から算出した眼内レンズを医師に渡す役割などがあります。年々スムーズに準備や介助が行えるようになってきていると感じる一方で、手術直前で患者さんが不安になっている様子は変わりません。震える患者さんの手を握ったり、覚えた現地語で話しかけたりしながら、手術の間、患者さんの不安が少しでも軽減できるように努めます。今年は井口さん、宝山さん、青年海外協力隊の島田さんと久永さんとで患者さんのケアをしながら手術がスムーズに行えるよう手分けして取り組むことができました。

今年の大きな変化といえば、モザンビーク眼科医の先生が手術されたことです。毎年、現地の先生が数名、活動に帯同され手術の助手に入っているのを見かけます。しかし、手術を一人でされているのは初めて見ました。また、近隣のザンビアという国から眼科医の先生が活動に参加しに来てくれました。白内障手術も自分の国で行っているとのことでしたが、学ばれるために参加したとのことです。10 年経って現地からも手術される眼科医の先生が現れたり、アフリカの他の地域からも情報が伝わっていることを知ると、活動を続けている成果が確かに出ていることを感じます。

（手術後の患者さんと石飛）

初めて活動に参加してから 5 年が経ち、色んなことが変わりました。10 年前から参加されている井口さんから、初めて参加した時の過酷な状況を活動の合間でお話ししていただきました。今年の活動に大きな問題を抱えることなく参加することが出来たのは、内藤先生はじめ、これまでの活動に関わる多く方の試行錯誤が積み重ねていった結果からだと思います。これから先、モザンビークの医療水準が先進国並みに発展していくためには、まだまだ時間がかかることと思います。私は微力なことしかできませんが、この素晴らしい活動に参加させていただけることに誇りを持ち、現地医療の発展に貢献できるようこれからも協力を続けていこうと考えています。

最後になりますが、毎年ながら長期間の活動にも関わらず快く送り出していただいたツカザキ病院スタッフの皆様に感謝をいたします。

再びペンバでのアイキャンプに参加して

井口博之

長年ネパールやモザンビークのアイキャンプに参加してきました。アイキャンプの醍醐味はなんと言っても手術後の患者さんの喜ぶ姿です。手術前は恐らく緊張していたことでしょう。それでも文句を言わずに自分の番が来るまでじっと待っている姿を見ると、手術後にはよく見えて欲しいと願わずに

いられません。アイキャンプの合間には写真撮影をしていますが、現地の人々の生活や患者さんに寄り添う家族の様子は印象深く感じています。今後も少しでもお役に立ちたいと考えています。

（現地の子供達と井口）

アイキャンプ報告
青年海外協力隊員ナンプラ在住
島田　晃良

大学を出てから約 5 年ほど音楽と教育の現場にしか足を踏み入れていなかった私にとってこのアイキャンプはとても新鮮で貴重な経験になりました。病院に患者以外として足を踏み入れることも、ペンバという町も初めてだった私ですが、もう何回もアイキャンプをされている内藤先生、宝山さんをはじめ皆さんが早速初日に手馴れた様子で荷物をほどく姿を見て、活動を続けられている重みをひしひしと感じました。

自分が活動したのは 5 日間でしたが、その中で一番印象に残っているのはチームとしてのまとまりです。手術中での自分たちの役割は患者さんを手術台に誘導する、眼帯をテープでとめて薬を渡す、等々でした。その中で少しでも自分が間違ったり戸惑ったりすると他の人や眼科医の先生までもが手術を行っているにもかかわらず助けてくださいました。ひとつの間違いが人の死に直結する手術室ならではの考え方と、常に気を配っている先生方の集中力に脱帽でした。

またポルトガル語が十分にできない患者さんのためにマクア語も勉強して行ったのですが、慣れない活動の中で自分がいっぱいいっぱいになってしまい、思うように話せませんでした。しかしそういう時にペンバの病院の職員さんたちがすぐに助けてくださり、診察、手術ともとてもスムーズに進んだように思います。職員の方々も私たちと同じように朝早くから夜遅くまで、日曜日までも働いており、少しモザンビーク人を見直した次第です（笑）。しかしそこまで関係者全員で頑張れたのも「患者さんの為に力になりたい」という共通意識が働いていたからではないかと思いました。だからこそ患者さんが術後に目が見えるようになったときもより一層感動できました。これからもアイキャンプの活動が続いていき一人でも多くの方の生活がより豊かになるように願っております。

（久長と島田の仲良しコンビ）

アイキャンプ報告
青年海外協力隊員
ナンプラ医療従事者養成学校配属
理学療法士　久長竜太

青年海外協力隊の久長竜太と申します。昨年度、アイキャンプに参加された先輩隊員から AOSA の活動のことを聞いており、機会があれば参加したいと考えていました。この度、念願叶って活動に参加することが出来ました。

私はモザンビークで理学療法士として活動していますが、途上国に特有な疾患の患者さんを担当することがあります。しかし、ここモザンビークでも白内障を合併している患者さんも多く存在します。リハビリテーションを受けて身体機能が回復し歩けるようになったとしても、白内障の影響で家での生活が難しいという患者さんは大勢います。「目が見えないことでこれだけ人の人生に影響を与えるのか」と感じていました。しかし、手術後に自分の目でしっかり歩き、歓喜あげる患者さんの光景を見て改めて視覚の大切さを実感させられました。

白内障の手術現場は初めてだったため、「いま、私達ボランティアに何ができるのだろうか」と少し不安な心境で手術当日を迎えました。しかし、手術が始まったらその不安も無くなっていました。日本人、モザンビーク人、ザンビア人と文化や言語も全く異なる人達が「患者さんに光を」といった 1 つの目標に向かって協力する姿が私達ボランティアに自信と希望をくれました。その雰囲気と熱意で私達ボランティアも安心して患者さんへの声掛け・誘導

が行えたのだと思います。また、最大連続約８時間という長時間の手術にも関わらず、集中力を切らさず正確にかつ迅速に作業を裁くスタッフにも驚きました。これもまた、明確な目標があるからこそ出来る技術なのではないかと感じました。

また、アイキャンプの活動に携わっていく中で医療物質や資金、眼科医が不足している状況で白内障の手術を受けることは容易なことではないことも分かりました。その状況で毎年、継続的に行われているこの活動によってモザンビークの患者さんに多くの光を与えているのは明白だと感じました。遠方から「失った光」を求め参加する患者さんも大勢おり、AOSA の活動が様々な地域で周知され、支えられているのだと思いました。

(患者さんと久長)

今回、アイキャンプに参加して多くの出会いと発見がありました。1 週間という短い期間で、AOSA スタッフ、宝山さん、現地スタッフ、光を取り戻した患者さん、団体を支えている支援団体の皆様、このような多くの方々と出会うことができました。この出会いは私達の大きな経験と財産になったことは間違いありません。ここで経験したことをモザンビーク、日本の方々にも広めていきたいと思います。最後になりましたが、このような貴重な経験の機会を与えてくださった AOSA の皆様、宝山様とその AOSA の支援団体の皆様に心より感謝申し上げます。

Ⅲ．2017 年度事業報告

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 10 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2017

（１）事業実施状況

2007 年の現地視察、2008 年からの９回の支援プロジェクトの成果をもとに第 10 回支援プロジェクトを立案し実行した。

2017 年 6 月 8 日～13 日の間、モザンビーク共和国北部のカボデルガド州ペンバに滞在してペンバ病院にて、眼科医療支援活動を行った。日本人スタッフは眼科医師３名､看護師１名､視能訓練士1名、ボランティアスタッフ３名、現地コーディネーター１名、合計９人の日本人チームとモザンビーク人眼科医３名、ザンビア人眼科医１名が地元眼科助手が集めた患者さん約 200 名を診察し、白内障手術適応患者 158 名を選択し手術を施行した。手術は両眼失明患者を優先した。

（２）事業計画中に生じた課題と対処内容

① 2016 年の第 9 回支援プロジェクトの結果をもとに、さらに発展的にプロジェクトを企画した。手術件数は 158 件で当初の目的数の 200 件には達しなかったが、ほぼ目的を達成した。患者さんの搬送手段が悪く、手術できなかった患者さんもいた。

② 昨年に続き僻地から来る患者さんの交通手段の確保に不備があり今後の課題である。この点を保健省及び現地スタッフに助言したが現地の厳しい社会情勢を反映していると思われる。

③ 今回もモザンビーク人眼科医師の参加により大変助けられた。特に手術中の患者さんにとって、部族語で声をかけることは重要である。また、ポルトガル語に堪能な日本人スタッフが多数参加することでスムーズに仕事ができた。特に青年海外協力隊の皆様の活躍は大きい。また、手術介助では看護師が大きな役割を果たしてくれた。

（３）事業の成果

白内障手術に関しては、158 名の白内障手術を行うことが出来た。手術結果も良好で、概ね満足できる成果を上げることが出来た。回数を重ねることにより相互理解が得られ、今後の活動はさらに発展すると思われた。

今回も前回同様、２名のモザンビーク人眼科医師を招待し、技術指導と情報交換を行えたことは大変有意義であった。さらにモザンビーク人眼科医に加えザンビア人眼科医が参加したことは、隣国との協力体制の構築に繋がると思われた。現地医師の今後の活躍を期待し、我々のプロジェクトへの参加招聘は継続していく予定である。また看護師、視能訓練士の参加により質の高い医療が円滑にできている。今後もコメディカルの参加依頼を継続していく予定である。

（４）広報活動など

①当会のホームページを更新した。さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信しつつ、充実したものに改善した。(http://aosa-eye.org)

②我々の活動を広く理解して頂くために、広報活動を行った。徳島プリンスロータリークラブ例会（2017 年 12 月 15 日）で活動内容を講演した。

Ⅳ. 2017 年度　会計報告

収入の部

１．寄附金	1,417,730
２．助成金＊	2,120,000
３．繰越金	2,333,591
４．利息	19
計	5,871,340 円

＊ 助成金内訳

アフリカ支援機構	1.000,000
日本眼科医会	500,000
徳島プリンスロータリークラブ	300,000
徳島新聞社会文化事業団	120,000
徳島県眼科医会	100,000
徳島大学眼科同窓会（黒瞳会）	100,000
計	2,120,000 円

支出の部

支出項目

１．第 10 回モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具・医薬品等	926,364
現地購入医薬品等	76,937
渡航経費補助	463,693
ザンビア人眼科医旅費	147,659
現地滞在費等	290,580
モザンビーク人眼科医旅費	78,968
現地日本人ボランティア旅費滞在費	122,000
現地病院支援等	107,313
現地物品輸送費	120,498
雑費	296,787
計	2,630,799 円

２．その他

日本眼科国際医療協力会議会費	50,432
印刷代（会報など）	250,432
送料	152,326
雑費	16,397
計	469,587 円

総支出合計	3,100,386 円
次年度繰越金	2,770,954 円
計	5,871,34

Ⅴ．2018 年度事業計画
（2018 年４月１日～2019 年３月 31 日）

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 11 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2018

１．事業の趣旨及び目的

過去 10 回の支援プロジェクト結果をもとに第 11 回支援プロジェクトを計画した。

① モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

② 人口 2400 万人に対し､眼科医は 15 名にすぎず、危機的状況である。本年度のアイキャンプでは過去にアイキャンプで技術指導した眼科医がアイキャンプ実施病院に就職している。彼の技術の上達状況を確認し、彼が独自に活躍出来るようにバックアップしたい。さらに、現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、奨学金等の資金的援助を検討し、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。引き続き ABE イニシアティブに参加表明し眼科技術者の養成を計画している。

③ モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

２．事業の内容

去年と同様に､｢モザンビーク共和国保健省｣と｢アフリカ眼科医療を支援する会｣との共催でプロジェクトを行う。｢モザンビーク共和国保健省｣は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師・看護師･眼科助手などの病院スタッフを動員し､我々NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。｢アフリカ眼科医療を支援する会｣は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

本プロジェクトは､｢在日モザンビーク共和国大使館｣､｢在モザンビーク日本大使館｣､｢徳島大学医学部眼科学分野｣､｢新潟大学医学部眼科学講座｣および現地で活動を行っている NGO｢モザンビークの学校を支援する会｣より支援・協力を受けている。

①“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 11 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からはガザ州シャイシャイでの活動要請があった。要請に従って 2018 年６月、シャイシャイにおいて、第１１回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画している。現地に１週間滞在し、白内障による失明患者約２００名の手術施行を目標としている。今回は、日本人眼科医４名に加えて、我々が指導してきたモザンビーク人眼科医１名および眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフ、眼軸長測定器をフルに使用してより質の高い手術を行う予定である。

② 眼科専門課程研修希望者への奨学金の支給

モザンビーク人眼科医の育成が急務であるが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間 1－2 名のみである。医学部卒業後に地方病院勤務の義務を終えて専門課程での研修を希望する医師は多いが、経済的な理由で断念する場合が多い。研修期間中に支給される給与では、首都マプトでの生活が経済的に困難なためである。長期的視野に立ち、眼科専門医の育成をサポートするため、専門課程への研修希望者に奨学金を検討している。国立エドアルド・モンドラーネ大学医学部眼科教授兼マプト中央病院眼科部長でモザンビーク眼科医のリーダーであるマリアーモ女史と協議し、年間１－２名の専門課程研修医師への奨学金を検討しているが課題は多い。

３．現地支援活動計画日程

2018 年６月に支援活動を実行する予定である。

6/5　日本発
6/6　モザンビーク入国、マプト泊
6/7　シャイシャイへ移動、シャイシャイ泊
6/8 ~ 6/12 眼科医療活動
　　（患者診察・白内障手術）
6/13　マプトへ移動、マプト泊
6/14　帰国の途に
6/15　帰国

４．事業の長期展望

（１）現地の協力

地方において病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受ける。それは根本的な医師不足に原因し、地方住民は眼科医療の恩恵を受ける事が非常に困難なためである。そこで、我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが重要である。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を啓蒙することが出来る。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に奨学金等の資金的援助を行い、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成

を支援する必要がある。
　これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を構築する必要がある。

（２）将来展望と資金計画
　アイキャンプを継続して行うことで、モザンビーク保健省との信頼関係がより強固なものとなって来た。今後現地の意見を聞きながらさらに発展させて行く必要がある。
　モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。特にモザンビークにおける医療機器の管理体制を強化する必要があるため、ABE イニシアティブに賛同し、眼科技術者の養成を計画している。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく予定である。将来的には徳島大学と現地大学との大学間協定締結やJICA プロジェクト等への申請も考慮していく。

広報活動など

　我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。
①ホームページの充実
　広報活動にホームページは不可欠であるため、今年度はさらにホームページを徐々に充実させる予定である。また動画サイトへの投稿なども積極的に行って来たがさらに充実させる予定である。
②学会での発表
　昨年度と同様に眼科手術学会インストラクションコース等で発表予定である。

Ⅵ. 2018 年度予算

収入の部

寄附金	1,200,000
助成金	1,300,000
繰越金	2,771,000
合計	**5,271,000 円**

支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具等	800,000
医薬品等	400,000
渡航費補助	500,000
現地移動費等	200,000
現地滞在費等	500,000
雑費	250,000
小計	2,650,000

2. その他

印刷費	300,000
通信費	100,000
雑費	100,000
予備費	2,121,000
小計	2,621,000
合計	**5,271,000 円**

（白内障の患者さん。瞳の中が白く濁っています。）

（手術後の回診を待つ患者さんたち。）

Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2017 年４月１日～2018 年３月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

（徳島県）
糸田川　誠也、井上　須美子、江村　俊二、
大村　和正、賀島　誠、片山　智子、兼松　誠二、
川端　昌子、喜多　久美子、木下　導代、
工藤　英治、幸地　吉子、坂部　和代、篠賀　健、
篠賀　知代、塩田　洋、島　裕美、下江　千恵美、
菅井　哲也、髙橋　順子、武田　美佐、竹林　優、
多田　糸図、谷　貴美子、谷口　冨志子、内藤　毅、
中屋　由美子、中山　寿子、西野　真紀、
仁田　美智子、秦　聡、秦　裕子、林　英憲、
板東　康晴、福本　幸司、藤井　邦隆、保科　正之、
牧野谷　卓宏、松本　治恵、三河　洋一、
水井　研治、美馬　彩、村尾　史子、盛　隆興、
山口　景子、山田　修三、山根　伸太、吉浪　弘子、
吉村　久、和田　恵子
黒瞳会、コンセール合唱団、徳島県眼科医会、
徳島新聞社会文化事業団、
徳島プリンスロータリークラブ、

（香川県）
赤澤　嘉彦、川口　博也、川口　みさ子、
小西　勝元、坂口　恭久、小路　竜一、谷　英紀、
西原　勝、松村　香代子、三崎　昌史、湊　真奈、
吉田　慎一

（高知県）
内田　佳永、田内　芳仁、戸田　裕子、林　しの、
林　勇樹、林　正和、山中　清香

（愛媛県）
木内　康仁

（岡山県）
浅原　貴志

（兵庫県）
石飛　直史、馬詰　裕道、佐藤　寛之、長澤　利彦、
野口　三太朗、沼田　愛、橋本　勝利、山崎　樹敬、
ツカザキ病院

（大阪府）
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、森脇　宗樹、
山本　忠男、山本　幸子

（滋賀県）
尾崎　志郎

（新潟県）
阿部　春樹、荒井　紳一、山崎　イサ子、
山崎　達男
医療法人社団仁悠会

（東京都）
社本　真紀、早馬　由美子
日本眼科医会
アフリカ支援基金

（千葉県）
竹林　宏

（茨城県）
長井　恭子、沼田　美紀

（埼玉県）
柳川　隆志

（北海道）
伊勢　知弘

（福岡県）
松井　雅美

（モザンビーク共和国）
宝山　晶子

（企業など）
（株）アーガス・ビー・エム・シー、
エイエムオー・ジャパン（株）、
（株）エムイーテクニカ、（株）オーヒラ、
参天製薬（株）、千寿製薬（株）、日本アルコン（株）、
マニー（株）
（有）山口メディカル、
（株）リブドゥコーポレーション

（寄附頂いた医療物資等）

（手術準備完了）

アフリカ眼科医療を支援する会　定款

第１章　総則

名称

第1条　　この NGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　　英語名を Association for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　　この NGO は、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地
新潟大学医学部眼科学講座内

第２章　目的および事業

第4条　この NGO は、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと、および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことを NGO 設立当初の目的とする。

第 5 条　この NGO 設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

第３章　会員

第６条　会員の種別

・正会員　この NGO の目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　この NGO の設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　1 万円
・団体　年会費　　5 万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

第４章　役員および選任等

第 10 条　この NGO に以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問 2 名以上 6 名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第 11 条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第 12 条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

第５章　総会

第 13 条　この NGO の総会は、正会員をもって構成する。

第 14 条　通常総会は、毎年 1 回開催する。

第 15 条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

第６章　会計

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

第７章　雑則

第１８条　この NGO の役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　　徳島大学国際センター国際協力部門特任教授
副理事長：荒井紳一　　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　　東淀鋼材（株）会長
理　事　：長澤利彦　　ツカザキ病院
理　事　：沼田美紀　　山王台病院付属内科・眼科クリニック
顧　問　：阿部春樹　　新潟大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：塩田　洋　　徳島大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：福地健郎　　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：三田村佳典　徳島大学医学部眼科教授

（敬称略：50 音順）

第１９条　この定款は 2015 年 4 月 1 日、一部訂正し、これを施行する

（ペンバビーチにて）